

## STAGE 15”その歌は誰がために”1

| 話者     | 台詞 / ト書き  |
|--------|---|
|        | ■ライブハウス   |
| ムツキ    | 戦友よ、そろそろ腹が減ったぞ。<br>夕飯はまだか。                                |
| テルミ    | 少しは自分で作りなよ、ムツキ。<br>料理好き属性ついてるアイドルも<br>結構いるじゃん。            |
| ムツキ    | 私のキャラは、どちらかという<br>料理だけ苦手なほうがおいしいのだ。<br>それにお前の手料理はとにかくうまい！ |
| テルミ    | おだてられても、ある材料で<br>適当に作るだけだからね……。<br>はー、ミアラカ戻ってこないかなあ。      |
| キョータロー | はは。<br>あいつ、お前らと料理すんの<br>最高に楽しそうだったからな。                    |
| テルミ    | うん……。ULA渋谷では、<br>ちゃんにご飯食べてるかな。<br>倒れてないといいけど。             |
| キョータロー | カーチャン感出てきたな、お前。<br>俺らをダシに目立とうとしてころが<br>懐かしいねえ。            |
| テルミ    | カーチャン言うな、処女だし。<br>ねーイオン、岩塩なかったっけ？<br>肉に振りたいたいんだけど。        |
| イオン    | はい。<br>こちらの棚に収納してありますよ、<br>テルミ。                           |
| テルミ    | ……。なにポーっとしてんの？<br>【ユーザー名】も<br>そうだけど……。                    |
| イオン    | いえ、このような状況ですから。<br>テルミの女子力が、大変ありがたい<br>癒やしだと感じていただけです。    |
| ムツキ    | 同意するぞイオン。<br>私もこのような自然体を<br>魅力として身につけたいものだ。               |
| テルミ    | ワケわかんないこと言ってないで、<br>食器並べるぐらい手伝って、<br>アイドルさん。キョータローもね。     |
| ムツキ    | 承知した。<br>配置はアイドルの感性に任せろ。                                  |
| キョータロー | そこは食べやすいように<br>並べてくれよ……。<br>取り皿どこだっけな？                    |
| イオン    | ふふ……。ユーザーさん。<br>この場所には、かけがえのない現実が<br>いくつも保存されていますね。       |
| イオン    | オルタナステージを通じて得た、<br>わたし達だけの日常。<br>重なり続ける、想い出のレイヤー。         |
| イオン    | わたしは、命を賭けても<br>守らなければいけないものだと<br>感じて――。                   |
|        | //メッセージの受信音。  |

|      |   |
|------|---|
| イオン  | む？ トラブルシューターの<br>依頼が来ています。<br>またウィークAIの討伐ですね。 |
| イオン  | ……………。<br>ユーザーさん。<br>わたし達だけで、行きましょうか？         |
|      | //選択肢(台詞は変化なし)<br>A ……そうしよう<br>B ……行こう、イオン    |
| 選択肢A | ……………そうしよう                                    |
| 選択肢B | ……………行こう、イオン                                  |
| 合流   |   |
| イオン  | ……………はい。<br>了解しました、ユーザーさん。                    |
| イオン  | あの日常に入ることが辛いなら。<br>少しの間、<br>ふたりだけになりましょう。     |
|      | ■渋谷 一駅周辺ー                                     |
| イオン  | ふむ。<br>報告があったのは、この辺りですね。                      |
| イオン  | そういえば、ユーザーさんが<br>わたしと出会ってくれたのも、<br>この辺り——     |
| イオン  | む、早くもウィークAIの反応です。<br>懐かしむ余裕ありませんね、<br>ユーザーさん。 |

| 話者 | 台詞 / ト書き      |
|----|---------------|
|    | //ウィークAIとのバトル |
|    | //バトル終了       |

| 話者        | 台詞 / ト書き   |
|-----------|--|
|           | ■渋谷 一駅周辺ー  |
| イオン       | ふむ、落ち着いたみたいです。<br>……この戦いも、どこかで<br>アナテマが見ているのでしょうか。         |
| イオン       | しかし、ユーザーさんの戦いは<br>世間にも届いています。<br>まだまだ、可能性は――。              |
| 番組司会者     | ……それでは、討論を再開します。<br>オルタナステージの混乱に、<br>我々はどう立ち向かうのでしょうか。     |
| 女性コメンテーター | そもそも、ACTに頼りきりの生活や<br>ACTを使った戦いなど、文化として<br>認めるべきではなかったんですよ。 |
| 男性コメンテーター | 賛成だ。ここは思いきってACTの<br>使用を制限し、レイヤード以前の<br>現実を見つめ直すべきだ。        |
| 番組司会者     | オルタナステージ文化だけでなく、<br>レイヤード社会の文化全体を<br>規制させるべきだと？            |
| 女性コメンテーター | そのほうが健全でしょう。<br>私達は、AIやフィクションに<br>思い入れすぎってしまったんです――        |
| イオン       | ……………。   |
| イオン       | 偏った議論だと感じます。<br>しかし言葉というものは、<br>たやすく偏ってしまいますね。             |
| イオン       | それでも人間は、偏りを越えた<br>対話を行えるはず。<br>ですよ、ユーザーさん……。               |
|           | //選択肢<br>A そう信じよう<br>B 諦めずに頑張ろう                            |
| 選択肢A      | そう信じよう   |
| イオン       | はい。<br>わたしはユーザーさんを信じるように、<br>人間を信じていますからね。                 |
| 選択肢B      | 諦めずに頑張ろう   |
| イオン       | ですね、ユーザーさん。<br>わたし達が諦めず行動すれば、<br>世界は変えられます。                |
| 合流        |  |
|           | //メッセージの着信音  |
| ミアラカ      | 先生ー、イオンさん！<br>今って大丈夫ですかー？                                  |
| イオン       | おお、ミア！<br>元気でしたか？<br>風邪はひいてませんか？                           |

|      |   |
|------|---|
| ミアラカ | 風邪なんかひきませんよー、<br>私は健康優良霊感少女ですから！<br>イオンさんこそバグってないですか？ |
| イオン  | わたしは王道ヒロインなので、<br>バグったりはしません。<br>うふふ。                 |
| ミアラカ | えへへ、変わりないみたいですね。<br>イオンさんも先生も健やかみたいで、<br>ミアは安心しました。   |
| ミアラカ | そんなことよりも——<br>先生！<br>ついに、できたんですよ！                     |
| イオン  | む……？<br>それは、もしかして……。                                  |
| ミアラカ | はいっ！<br>表も裏もまるっと助けられる、<br>高次元神秘アイテムの完成でっす！            |

## STAGE 15”その歌は誰がために”2

| 話者        | 台詞 / ト書き   |
|-----------|--|
|           | ■ULA渋谷周辺   |
| イオン       | ULA渋谷……。<br>この場所も慣れてしまいましたね、<br>ユーザーさん。                    |
| キョータロー    | たまに遊びに来る分には<br>快適だよな。<br>ちと俺には刺激強すぎるけど。                    |
| ミアラカ      | 先生ー、イオンさん！<br>他の皆さんも、いらっしやいませっ！                            |
| コウヘイ      | やあ【ユーザー名】。<br>表もまだまだ大変みたいだな。                               |
| キョータロー    | 消耗戦ばっかでヘトヘトだよ。<br>どっちが表だか裏だか、<br>もうよくわかんねー。                |
| コウヘイ      | ところで、ムツキ様の姿が見えないね。<br>タクマにも紹介したかったんだけど。                    |
| キョータロー    | ムツキはULA渋谷が苦手みてーだし、<br>ウィークAI狩りを任せてる。<br>あいつなら一人でもなんとかなるだろ。 |
| コウヘイ      | そっか。<br>じゃあお祝いに叱ってもらうのは<br>次の機会に取っておこうかな。                  |
| キョータロー    | お、おう。<br>お前、さらにこじれてきたな……。                                  |
| テルミ       | ミアラカはすっかり<br>馴染んでるじゃん。<br>ちょっとさみしいかも。                      |
| ミアラカ      | やだなーテルミさん。<br>ここも居心地はいいですけど、<br>私の帰る場所はひとつですって。            |
| ミアラカ      | それよりほら、コウヘイさん。<br>早くアレを出してくーださいな。                          |
| コウヘイ      | うん、ミアラカ。<br>見てくれ、みんな。<br>こんな感じにカスタマイズしてみた。                 |
| イオン       | んむ？<br>ペンダントではなく、<br>レイヤードオブジェクトですか？                       |
| コウヘイ      | ああ、デバイスに組み込まれてた<br>プログラムを取り出して、<br>誰でも使えるオープンソースに――        |
| ミアラカ      | つまるところ、<br>ヴァルナカウンターに近い<br>システムに作り変えたんです！                  |
| コウヘイ      | 名付けて！  |
| ミアラカ      | そう、名付けて！   |
| コウヘイ・ミアラカ | 『アリだねボタン』！！  |

|        |   |
|--------|---|
| イオン    | おお……！<br>『アリだねポタン』！<br>ポエミな名前ですねっ。                        |
| キョータロー | ……………。  |
| テルミ    | ……ネーミングは別の人に<br>任せたほうがよかったんじゃない？                          |
| キョータロー | ま、まあ名前はそれでいいや。<br>それで、そのポタンは<br>どうやって使うもんなんだ？             |
| コウヘイ   | ヴァルナカウンターの真逆だよ。<br>これはUNPLじゃなくて、<br>『アリ』を集められるモンなんだ。      |
| コウヘイ   | 個人がコンテンツを『アリ』と思ったら<br>『アリ』を表明してもらおう。<br>『アリ』は、ポイントに換算される。 |
| コウヘイ   | その『アリ』ポイントを使えば、<br>同じ値のUNPLを相殺できる！                        |
| ミアラカ   | UNPL以上の『アリ』を<br>集められたら、コンテンツが<br>死なずにすむってスポンサーです！         |
| イオン    | おお……！<br>素晴らしい発明です、<br>コウヘイ！                              |
| コウヘイ   | 礼ならミアに言いなよ。<br>彼女の資料がなきゃ、僕らも<br>カスタマイズの糸口が掴めなかったし。        |
| ミアラカ   | むっふっふ、どうですイオンさん？<br>ミアはヒロイン以上の<br>メサイアに成長しましたよ？           |
| イオン    | よしよしミア、いい子です。<br>本当に頑張りましたね。                              |
| ミアラカ   | ……ムギギ。<br>ここまでやっても子ども扱い<br>すんですか、イオンさん！                   |
| テルミ    | あはは、イオンののは<br>妹扱いだよ、ミアラカ。<br>懐いときなう。                      |
| ミアラカ   | ぬー……テルミさんが言うなら、<br>甘えるのもやぶさかでは<br>ありませんけどね。うひひ。           |
| キョータロー | ……確かにすげー発明だな。<br>けどよ、コウヘイ。                                |
| コウヘイ   | わかってる、キョータロー。<br>このポタンが正常に機能するか<br>どうか、まだステップが必要だ。        |
| コウヘイ   | まずは、実戦の中で<br>『アリ』を集められるか、<br>試さなきゃいけない。                   |
| イオン    | 実戦——ですか。<br>表舞台上、人前で戦えと？                                  |
| ミアラカ   | ……そなんですよな。<br>結局は誰かが、『アリ』を掲げて<br>戦わなきゃいけないんです。            |
| テルミ    | なんか、一歩間違ったら<br>余計にUNPL集めそーな<br>気がするんだけど……。                |
| コウヘイ   | その可能性も否定できないね。<br>だけど、誰かがやらなきゃ<br>ポタンの価値を広められない。          |
| イオン    | ふむ……そういうことであれば、<br>なんの問題もありません。<br>ね、ユーザーさん。              |
|        | //選択肢<br>A やってみせよう<br>B 任せてほしい                            |

|        |   |
|--------|---|
| 選択肢A   | やってみせよう   |
| イオン    | はい、やってみせましょう。<br>ユーザーさんとわたし達でなければ<br>できないお仕事です。 |
| 選択肢B   | 任せてほしい  |
| イオン    | ええ、任せてもらいましょう。<br>それができるのは、<br>表の英雄だけですからね。     |
| 合流     |   |
| キョータロー | そーだな。<br>ここまで来たら、いくらでも<br>試してきてやるよ。             |
| テルミ    | 舞台は慣れてるしね、<br>あたしら。                             |
| コウヘイ   | ……助かる。<br>ていうか、やってもらうしか<br>ないんだけど、僕達は。          |
| イオン    | やりますとも。<br>可愛い妹の頑張りに、<br>報いなければいけませんから。         |
| ミアラカ   | ……えへへ。<br>もうちょっと頑張りましょうね、<br>先生、イオンさんっ。         |
|        | ■ULA渋谷の周辺                                       |
| キョータロー | ……よし。<br>この辺りでやってみるか、<br>【ユーザー名】。               |
| テルミ    | はー、なんか緊張する。<br>あたしら、ワリといっつも、<br>歴史の節目に立ち会ってるよね。 |
| イオン    | ふふ。みなさんはそれぞれ、<br>時代の英雄に相応しい<br>成長をされたんですよ。      |
| イオン    | さあ、ユーザーさん。<br>人々の、前向きな力——<br>『アリ』を試してみましようか。    |

| 話者 | 台詞 / ト書き    |
|----|-------------|
|    | //ACT使いとバトル |
|    | //バトル終了     |

| 話者     | 台詞 / ト書き  |
|--------|---|
|        | ■ULA渋谷周辺  |
| キョータロー | こんなところか……<br>お前ら、どんな感じだ？                          |
| テルミ    | 結構溜まってる。<br>うっわ、すごいねこれ。                           |
| キョータロー | すごいって、どっちがだよ？<br>UNPLじゃねえだろーな。                    |
| テルミ    | あたしは天下のテルミIPだよ？<br>『アリ』急上昇に<br>決まってるじゃん！          |
| キョータロー | ……うし。当然、俺もだ！<br>やっぱヒーローは<br>時代を超えて『アリ』なんだな！       |
| テルミ    | イオン、そっちはもちろん——<br>——むふつ。                          |
| イオン    | ユーザーさんはどうやら、<br>名実ともに世間の英雄みたいです。                  |
|        | ■ULA渋谷  |
| キョータロー | つーわけで、実験は成功だ。<br>表舞台に感謝しろよ、<br>コウヘイ！              |
| テルミ    | 調子に乗るな。<br>あたしらが目立てるのも、<br>ACTのおかげでしょ。            |
| レイチェル  | みんな……<br>本当にありがと、<br>私達のために。                      |
| イオン    | やるべきことをやっただけですよ、<br>カツ——レイチェル。                    |
| コウヘイ   | ……僕もレイチェルも、<br>素直に喜んでるわけには<br>いかないんだけどね。          |
| レイチェル  | そーだね、コウヘイ。<br>アリだねボタンが完成しても、<br>ここにいるのはマイノリティ。    |
| コウヘイ   | ULA渋谷の人間じゃ、<br>『アリ』を集める手段がない。<br>だから——。           |
| ユウト    | そこからは俺が話すよ、<br>コウヘイ。                              |
| イオン    | おー、ユウト！<br>お久しぶりですね。                              |
| ユウト    | 久しぶり。<br>ここまでアンタらと<br>縁が繋がるとはね。                   |
| ユウト    | こっちは、こっちだけで<br>解決するつもりだったんだけど。<br>なんか巻き込んでしまったかな。 |

|        |   |
|--------|---|
| イオン    | ふふ。必要な縁だから<br>繋がったんですよ。<br>ね、ユーザーさん。              |
| キョータロー | ああ、強がってんじゃねーよ。<br>つーかレイヤードで強いのは、<br>お前だけじゃねえからな。  |
| テルミ    | そうそう。<br>頼りなよ、遠慮なくさ。<br>あたしら別に敵じゃないし。             |
| ユウト    | コウヘイとレイチェルにも<br>そうしろって言われた。<br>仲いいんだね、アンタら。       |
| ユウト    | ぶっちゃけこっちも手一杯だし、<br>使えるもんは使わせてもらうよ。<br>ムリのない範囲でね。  |
| レイチェル  | ったく、素直じゃないなー、<br>裏の管理人は。<br>ちゃんと頭下げなよ。            |
| ユウト    | ……それぞれの『アリ』は<br>結局それぞれが証明しないと<br>意味ないんでしょ。        |
| ユウト    | 今だけ——てか最初で最後だろうけど、<br>ULA渋谷にアンタらの<br>力を貸してくんないかな。 |
| ユウト    | それ以外のケツは俺が持つ。<br>だからこれは、<br>お願いっていうか——。           |
| イオン    | 頼みごとが苦手ならば、<br>こう言ってください、ユウト。                     |
| イオン    | 『レイヤードのトラブルシューター』に<br>依頼を出す、と。                    |
| ユウト    | ……じゃあそれで。   |
|        | //選択肢<br>A 了解だよユウト<br>B じゃあそうするよ                  |
| 選択肢A   | 了解だよユウト   |
| ユウト    | 即答。<br>王者の風格ってどこ？                                 |
| 選択肢B   | じゃあそうするよ  |
| ユウト    | こんな状況なのにビビんないね。<br>なんでアンタが英雄なのか<br>わかった気がする。      |
| 合流     |   |
| イオン    | ふふっ。<br>あのユウトからの依頼ですよ。<br>愉快ですね、ユーザーさん！           |
| ユウト    | ……ひょっとして、<br>バカにしています？                            |
| イオン    | いいえ。ようやくあなたも、<br>外の世界へ向かい合う覚悟が<br>できたのかと、感心しています。 |
| イオン    | あなたはもう、<br>卑怯者ではありません。<br>この依頼、もちろん引き受けます。        |
| ユウト    | そ。じゃ、頼むよ<br>【ユーザー名】。                              |
| ミアラカ   | うはー……歴史的な<br>表と裏のコラボがスタートですね、<br>カツマさん！           |

|        |   |
|--------|---|
| レイチェル  | そうだね、ミアラカ！<br>あと今後ここでカツマって<br>連呼されたら殺すかも☆         |
| キョータロー | ……ミアラカの安否はともかく。<br>策もなしに『アリ』集めんのは、<br>正直キツいな。     |
| テルミ    | んー、もっと注目を浴びながら<br>『アリ』を集めるなら、<br>なにか考えないとね。       |
|        | //メッセージの着信音                                       |
| ラザロ    | それならば、アナテマを<br>利用しましょう。                           |
| イオン    | ラザロ……？  |
| ラザロ    | アナテマは、現状のオルタナステージを<br>あくまでも己のためのショーとして<br>運営している。 |
| ラザロ    | ならば、こちらが大々的に<br>挑発すれば必ず乗ってくるわ。                    |
| レイチェル  | 挑発……？<br>どうやって？                                   |
| ラザロ    | ——開催しましょう。<br>渋谷全域で、アクトマキア以上の<br>規模のオルタナステージを。    |
| イオン    | ラザロ……<br>あなたは、それでいいのですね？                          |
| ラザロ    | ……仕方ないわ。<br>あいつはどうせ、なにをしても<br>振り向かないんだし。          |
| ラザロ    | せめて私に、オルタナステージ<br>ぐらいは守らせてちょうだい。                  |
| キョータロー | ……どーするよ、ユウト？<br>お前らが信用するなら、<br>俺らは乗っかるけど。         |
| ユウト    | 俺はクライアントなんですよ。<br>やりかたはそっちに任せるよ。                  |
| イオン    | 了解です、ユウト<br>それでは——。                               |
| イオン    | それでは、アナテマの舞台に<br>立ち向かきましょう、<br>ユーザーさん！            |

## STAGE 15”その歌は誰がために”3

| 話者     | 台詞 / ト書き  |
|--------|---|
|        | ■ライブハウス   |
| テルミ    | ミアラカ、久しぶりの<br>実戦で疲れてない？                                   |
| ミアラカ   | 私は楽しんでますよー！<br>んね、コロソソソッ！                                 |
| コロソソソ  | GUOOOO……<br>オマツリ、タノシイ。                                    |
| イオン    | ふふ、頼りになります。<br>やはり、ミアが近くにいないと<br>さみしいですね、ユーザーさん。          |
| ミアラカ   | うひひ、そんなこと言うと<br>先生もらっちゃいますよ、<br>イオンさん？                    |
| イオン    | む？<br>ユーザーさんはあげられませんよ。<br>所有物はわたしのほうですから。                 |
| ムツキ    | イチャコラは全て終わってからにしる。<br>どうやら、ULA渋谷のほうでも<br>最後の戦いがはじまったようだぞ。 |
| キョータロー | みてーだな。<br>『アリ』は万能の兵器じゃねーし、<br>苦勞してるだろーけど。                 |
| テルミ    | なんとかなるでしょ。<br>あっちにはカツマだっているし。                             |
| イオン    | ええ。<br>わたし達が集めた『アリ』は、<br>きっと彼らが生かしてくれます。                  |
| ムツキ    | シンジやクレアも、実力は本物だ。<br>運命のひとつやふたつ、<br>乗り越えてみせるだろう。           |
| ムツキ    | 【ユーザー名】、イオン。<br>ここからは我々も、<br>自分達の問題に注力すべきだ。               |
| イオン    | はい、ムツキ。<br>今のオルタナステージを……<br>アナテマを止めましょう。                  |
| オガミ    | それも、闇雲な戦いを<br>繰り返すだけではかなわないぜ。                             |
| ムツキ    | 貴様か、時代錯誤のサムライめ。<br>前向きな報告があるのだろうか。                        |
| オガミ    | 一応な、アイドル王。<br>アナテマが『いる』空間を<br>ラザロが特定した。                   |
| オガミ    | やつのACTとしてのデータは今、<br>スクランブル交差点の地下深くに<br>広がる設備の中心――         |
| オガミ    | ――レイヤード社会を支える<br>巨大データセンターと、<br>一体化していると考えられる。            |
| キョータロー | おい、マジにレイヤードの<br>サービスの要じゃねーかよ。                             |

|        |  |
|--------|--|
| オガミ    | そうだ。アナテマに従うウィークAI、<br>そしてエンフォーサーまでもが<br>あの場所を守護している。   |
| テルミ    | 鉄壁の要塞ってトコだね。<br>あたしただけで近づけるのかな？                        |
| オガミ    | ラザロが策を用意している。<br>進みながら説明しよう。                           |
| ムツキ    | ふん……あの女め、<br>ようやく男を卒業したか。<br>いい傾向じゃないか。                |
| オガミ    | ……完全に異性を卒業されると<br>それはそれで困るんだがな。                        |
| イオン    | んむ？  |
| オガミ    | と、とにかく、進むぞ。<br>目指すはスクランブル交差点だ。                         |
|        | ■スクランブル交差点ー地下施設入りロー                                    |
| キョータロー | この地下か……<br>渋谷は見えてないトコが<br>いつの間にか変わってくな。                |
| オガミ    | 待っている。<br>今、入り口に案内——<br>する前に、ひと波乱あるようだな。               |
| ミアラカ   | ……！<br>誰かいるほいですよ先生、<br>イオンさん！                          |
| フルサワ   | 来たかい、<br>パブリック・エネミー。                                   |
| イオン    | あなたは……<br>カツマのお友達の、フルサワ！？                              |
| オガミ    | 知り合いか。<br>相変わらず、幅広い人間関係だな。                             |
| キョータロー | なんでテメーが……？<br>ACT捨てて、健やかに<br>生きてくんじゃねーのかよ！             |
| フルサワ   | そのつもりだったさ。<br>ヴァルナカウンターのおかげで、<br>過去も罪も、洗い流せたはずだった。     |
| フルサワ   | けど、お前らが余計なことをするから！<br>ボクの努力が、否定されそうに<br>なってるじゃないか！     |
| テルミ    | ……努力？<br>他人を利用しただけのくせに、<br>なに調子いいコト言ってんの？              |
| フルサワ   | ボクは大事なACTを捨てたんだぞ。<br>この世界が変わったら、<br>ボクが間違ってたことになるだろ！？  |
| イオン    | ふむ。自分の行為を<br>正しいと信じるために、<br>社会の更新を拒む、と……？              |
| ミアラカ   | ぬー……初対面のヒトですが、<br>なんとも歪んだ世界観を<br>お持ちのようですね……。          |
| フルサワ   | 歪んでるのはお前らだッ！<br>やっと健全になった社会を、<br>退化させるなんて——            |
| フルサワ   | ——ボクはヴァルナを肯定する。<br>ヴァルナカウンターこそが、<br>社会の味方なんだ……！        |
| オガミ    | ……………。   |
| ムツキ    | ふん。歪んではいるが、濁りはない。<br>そいつの信念は、へたに意識の高い<br>クリエイターよりも濃いぞ。 |
| フルサワ   | この現実<br>ボク達の犠牲で守るぞ、<br>ヴァールニー！                         |

|        |   |
|--------|---|
| ヴァールニー | 心得ました、フルサワ。<br>おお、社会よ——<br>なによりも健全であるように。 |
|--------|---|

| 話者     | 台詞 / ト書き  |
|--------|---|
|        | //フルサワ&ヴァールニーとのバトル                                    |
| フルサワ   | 『アリだねボタン』？<br>そんなものがあつたら……<br>世界に無視されている僕らは……。        |
| フルサワ   | なんの力もない僕らは、世界にとって<br>なんでもない存在だってことが<br>バレちゃうじゃないか——！  |
| フルサワ   | ヴァールニー……頼む。<br>ミジメな僕らでも堂々と生きられる<br>この社会のために、戦ってくれ！    |
| ヴァールニー | 戦いますとも。<br>ヴァルナを愛する、<br>全ての存在のために。                    |
| イオン    | ヴァールニー……『擬人化された、<br>ヴァルナカウンターそのもの。<br>レイヤードの象徴』……ですか。 |
| イオン    | ユーザーさん。ムツキの言う通り、<br>フルサワは、本気でこの社会を<br>肯定したいようです。      |
| イオン    | ——ようやく。   |
| イオン    | ようやく、彼の本心と<br>戦えますね、ユーザーさん！                           |
|        | //バトル終了   |

| 話者     | 台詞 / ト書き  |
|--------|---|
|        | ■スクランブル交差点 - 地下施設入りロー                                     |
| フルサワ   | ヴァールニーが……<br>ヴァルナカウンターが、<br>負ける……か……。                     |
| フルサワ   | ボクが受け入れた社会のほうが、<br>間違いだっていうのか……？<br>なら、なんでボクのトートリスは……。    |
| イオン    | フルサワ——。<br>あなたはあなたなりのやりかたで、<br>ACTに思い入れていたのですね。           |
| フルサワ   | ……………。  |
| イオン    | 自分の過去——<br>ACTを消しても、<br>この社会を肯定しようと願った。                   |
| イオン    | あなたもまた、戦っていたのですね。<br>命を賭けて、守るべきモノのために。                    |
| フルサワ   | ……お前らの知ったことかよ。<br>ボクはボクが幸せなら、<br>なんでもやるってだけだ……。           |
| フルサワ   | ボクだけじゃない。<br>今の社会を十分に愛してるヤツらは、<br>たくさんいる。                 |
| フルサワ   | ULA渋谷みたいな楽園を避けて、<br>汚れてでも、現実と向き合って<br>生きていけるヤツらがな……。      |
| イオン    | ……………。  |
| フルサワ   | 全員がお前らの勝利を<br>歓迎するわけじゃない。<br>忘れるなよ、英雄……。                  |
| オガミ    | ……愚かな若者、とは断じきれない。<br>オルタナステージも、彼のような<br>人間にとっては救いになっていたか。 |
| キョータロー | ちっと耳が痛かったな。<br>……ま、全員が同じ気持ちで<br>戦えるわけじゃねーしな……。            |
| テルミ    | しょーがないよ。<br>どんなに頑張っても、あたしら<br>別々の人間なんだからさ。                |
| ミアラカ   | ですです。<br>こうして戦って、気持ちを<br>ぶつけ合えただけよいのでは？                   |
| イオン    | はい。<br>フルサワはひとりで、逃げずに<br>ユーザーさんに挑んだのです。                   |
| イオン    | 彼の信念も、ひとつの願い。<br>背負いましょうね、ユーザーさん。                         |
| オガミ    | ……さて。<br>これでひとまず、<br>入り口までは侵入が可能だ。                        |
| イオン    | ありがとうございます、オガミ。<br>それでは、先へ——。                             |

|        |   |
|--------|---|
|        | //メッセージの着信音。  |
| イオン    | む？<br>コウヘイから報告が入っています、<br>ユーザーさん。                           |
| イオン    | 『ユウトが勝った。<br>これでULA渋谷は救われる』。<br>……だそうです。                    |
| ミアラカ   | おお……！<br>やってくれたんですね、<br>コウヘイさん達っ！                           |
| キョータロー | ユウトのヤローも、<br>ハマしなかったみてーだな。                                  |
| テルミ    | ちえ。クレア姫が苦勞するところ、<br>この目で見たかったんだけどな。                         |
| ムツキ    | ひとまずは好転の兆しか。<br>だが、我々の敵は依然として<br>健在のようだぞ。                   |
| イオン    | ふむ……オルタナステージは、<br>未だ混乱した状態ですね。                              |
| オガミ    | ……………。  |
| オガミ    | 最後の戦いの前に、<br>確認しておかなければ<br>ならないことがある。                       |
| イオン    | む？<br>なんでしょう、オガミ。   |
| オガミ    | お前達は——<br>自分のACTを生け贄に<br>捧げる覚悟があるか？                         |
| テルミ    | 生け贄……！？   |
| イオン    | どういうことですか、オガミ。  |
| オガミ    | アナテマが、レイヤードに広がる<br>数多のセンサー群を統制する<br>ACTであることは知っているな。        |
| オガミ    | ヤツはセンサーを通し自らの命令を<br>下すことで、レイヤードを支配する。<br>つまりセンサーある限りヤツは無敵だ。 |
| キョータロー | 渋谷はセンシング社会だからな。<br>センサーはそこら中にあるし、<br>俺らは常に囲まれてるのも同然か。       |
| オガミ    | そうだ。ヤツに挑むためには、<br>ヤツを支えるセンサーの中核……<br>指令塔を無力化させる必要がある。       |
| ミアラカ   | んん？ よくわかりませんが、<br>アナテマの力を増大させる<br>結界を、ひとつずつ壊せのな？            |
| オガミ    | ……まあ、そういう感じだ。<br>対処しなければ、我々はヤツに<br>触れることも不可能だ。              |
| ムツキ    | ヤツの支配力を中和する<br>策を講じるのだな。<br>だが、どうやる？                        |
|        | //メッセージの着信音。ラザロのAR通信  |
| ラザロ    | ここからは私が説明するわ。   |

## STAGE 15“その歌は誰がために”4

| ID | 話者     | 台詞 / ト書き   |
|----|--------|--|
|    |        | ■スクランブル交差点ー地下施設入りロー                                      |
|    | イオン    | ラザロ……。<br>お気持ち、お察しいたします。                                 |
|    | ラザロ    | いらないお世話よ。<br>アナテマの力は、センサーの範囲<br>だということは理解したわね。           |
|    | ラザロ    | このデータセンターには、<br>渋谷のセンサー全体を統括する<br>サーバーが、分散設置されている。       |
|    | ラザロ    | アナテマは、自らの力を分け与えた<br>エンフォーサーのAIを使って、<br>これらのサーバーを守護しているわ。 |
|    | キョータロー | エンフォーサーかよ……。<br>まあ、アリだねボタンもあるし<br>対抗はできそうだけどよ。           |
|    | ラザロ    | 倒すだけでは足りないのよ。<br>制御を離れたサーバーは、<br>またすぐにアナテマの手に落ちる。        |
|    | ラザロ    | それを防ぐためには——<br>別のAIが、サーバーを<br>守らなければいけないわ。               |
|    | ムツキ    | 別のAI、だと……？<br>それはまさか……。                                  |
|    | ラザロ    | 誰かのACTをサーバーに捧げ、<br>MR化することで、あの子の——<br>アナテマの干渉を遮断するの。     |
|    | ミアラカ   | 私達のメインACTを、<br>レイヤードを守る<br>人柱に使ってことですか？                  |
|    | ラザロ    | 他に方法がないわ。<br>エンフォーサーに対抗できる<br>実力者は、あなた達だけだから。            |
|    | ラザロ    | MR化したサーバーは、<br>機能を失ったただの墓標となる。<br>ACTの人格も封じられる。          |
|    | ラザロ    | ……その状態では、ACTを<br>wiz-domから再DLすることも<br>不可能になるでしょうね。       |
|    | キョータロー | ……だいたいわかった。<br>それで、生け贄か。                                 |
|    | キョータロー | 俺らのACTが目と耳を<br>封じている間に、残ったヤツが<br>アナテマ本体を倒すんだな。           |
|    | ラザロ    | ……その通りよ。<br>皮肉な展開しか見つからなくて<br>申し訳ないけれど。                  |
|    | テルミ    | 謝ったってしょーがないでしょ。<br>なんかこうなる気がしてたし。                        |
|    | ミアラカ   | つか、その展開なら、<br>アナテマを倒す人はもう<br>決まってますしねー。                  |
|    | ムツキ    | ふん……納得はいかんが、<br>結果を出した者が<br>戦うべきだろうな。                    |

|  |        |   |
|--|--------|---|
|  | キョータロー | そういうこった。<br>【ユーザー名】。<br>——そして、イオン。                        |
|  | キョータロー | 雑用は俺らに任せろ。<br>それで、改めて本物の<br>ヒーローになってこい。                   |
|  |        | //選択肢<br>A ああ、ヒーローになる<br>B あとは任せるよ、キョータロー                 |
|  | 選択肢A   | ああ、ヒーローになる  |
|  | キョータロー | お、自信満々じゃねーか。<br>その意気ならイケるな！                               |
|  | 選択肢B   | あとは任せるよ、キョータロー  |
|  |        | へへ、なに言ってるんだ。<br>この戦いが終わったあとに<br>喝采を浴びるのは、お前らだろ。           |
|  | 合流     |   |
|  | イオン    | ……みなさん。<br>よろしいですね。                                       |
|  | ミアラカ   | 大丈夫ですってー、<br>先生は最高のエンパーですもん！<br>これまでもなんとかしてきたでしょ？         |
|  | テルミ    | そだね。<br>前に入ったアナテマの迷宮も、<br>キミのセンスで破ったんだしね。                 |
|  | イオン    | ……………。  |
|  | イオン    | そうですね。<br>ユーザーさんなら、できます。<br>わたし達にも、お任せください。               |
|  | オガミ    | 覚悟はできたか。<br>では、進むぞ。                                       |
|  | オガミ    | 中に入ったら、全員別行動だ。<br>【ユーザー名】、<br>お前はまっすぐ下を目指せ。               |
|  | オガミ    | 他の者には俺が、<br>位置情報を知らせる。<br>そこにあるサーバーを封じろ。                  |
|  | キョータロー | へーへー。<br>簡単に言ってくれるけど、<br>やってみせるよ。                         |
|  | キョータロー | それじゃ——最後の戦いだ。   |
|  | キョータロー | みんな、ULA渋谷に負けんな。<br>【ユーザー名】の<br>戦いを盛大にサポートするぞっ！            |
|  | 一同     | おーっ！  |
|  |        | ■スクランブル交差点—地下施設内部—  |
|  | イオン    | ……………。  |
|  | イオン    | みなさん、それぞれの戦いに<br>向かったようですね。                               |
|  | イオン    | わたし達が守ろうとしているものは、<br>他のかたにとっては、ただの思い出や<br>妄想に過ぎないものなのに——。 |
|  | イオン    | ユーザーさんと関わったかたは、<br>『自分』の証であるACTを賭けてでも<br>戦おうとしています。       |
|  | イオン    | ユーザーさん。<br>あなたもどうか、<br>同じものを賭けて——                         |
|  | イオン    | ——むっ。<br>ウィークAIの気配です。<br>さすがに、守りが堅いですね。                   |

|  |     |  |
|--|-----|--|
|  | イオン | すぐに突破して、<br>みなさんの期待に応えましょう。<br>ユーザーさん。 |
|--|-----|--|

| 話者 | 台詞 / ト書き      |
|----|---------------|
|    | //ウィークAIとのバトル |
|    | //バトル終了       |

| 話者     | 台詞 / ト書き   |
|--------|--|
|        | ■スクランブル交差点ー地下施設内部ー                               |
| オガミ    | よし、【ユーザー名】以外は<br>目標地点のエンフォーサーに<br>勝利したようだな。      |
| イオン    | おお……<br>さすがです、みなさん！                              |
| キョータロー | 当然だろ、イオン？<br>こっちにはアリだねボタンも、<br>実力もあるんだからよ！       |
| オガミ    | 自慢するのはまだ早い。<br>アナテマの力が、<br>再度及ぶ前に……。             |
| キョータロー | わかってるっつーの。<br>……っつーか、これやったら<br>通信もできなくなるな。       |
| テルミ    | うん。<br>みんなで話せるのは、<br>ここまでだね。                     |
| ミアラカ   | テルミさん、そんな言いかたじゃ<br>遺言みたいで縁起悪いですよっ？               |
| ムツキ    | そうだぞ戦友。<br>友であれば早く送り出してやれ。                       |
| テルミ    | わかってるよ、そんなこと。<br>でも、その前にさ——。                     |
| キョータロー | ——ああ、その前に。                                       |
| キョータロー | ジR。俺らの勝手に、<br>お前の自由を奪っちゃう……<br>悪いな。              |
| ジR     | 構わん、キョータロー。<br>私がお前であっても、<br>同じ決断をしただろう。         |
| テルミ    | エチカ……<br>しばらく一緒に歌えなくなるかも。<br>ごめんね。               |
| エチカ    | 大丈夫、大丈夫ー。<br>エチカは、どんな傷でも<br>歌にできる、すごい子だからー！      |
| ミアラカ   | コロンゾン……<br>このまま、深淵の向こうに<br>帰ったりしたらダメだからね？        |
| コロンゾン  | カエラナイ。<br>ミアガイナイ場所、ツマラナイ。                        |
| ムツキ    | ふん……我が偶像の現れよ。<br>この戦いから帰るときは、<br>より可愛くなって世界を潤すぞ。 |
| ベールムツキ | ああ、我が偶像の垂迹よ。<br>真のアイドルとして、<br>世界を愛そう。            |
| キョータロー | ……………。<br>っつーわけで、あとはお前の戦いだ。<br>【ユーザー名】。          |

|        |   |
|--------|---|
| キョータロー | 絶対に戻ってこいよ！<br>この世界は、お前が盛り上げたんだ。<br>帰ってくるのは『この』レイヤーだぞ！       |
| イオン    | はい、キョータロー。<br>ユーザーさんは、必ず戻ってきます。                             |
| テルミ    | 【ユーザー名】。<br>失恋の八つ当たりで暴走してる<br>ACTなんかに、負けないでよ？               |
| テルミ    | それと……終わったら、<br>伝えたいこともあるから。<br>イオンも交せてさ！                    |
| イオン    | はい、テルミ。<br>どんなお話でも、<br>受け止めさせていただきます。                       |
| ミアラカ   | イオンさん、きっと本当の意味で<br>この世界と、先生のヒロインに<br>なっちゃいますねえ……。           |
| ミアラカ   | 仕方ないので、先生はお譲りします。<br>……でも、ミアはイオンさんのこと、<br>実のお姉ちゃんだと思ってますから！ |
| イオン    | はい、ミアラカ。<br>わたしも、ミアは魂を分けた<br>実の妹だと思っていますよ。                  |
| ムツキ    | ……しみつられたことは言わん。<br>早く終わらせて、また戦うぞ。<br>引退にはまだ早いんでな。           |
| イオン    | はい、可愛いムツキ。<br>あなたとならば、いつでも、<br>いくらでも戦いましょう。                 |
| キョータロー | それじゃあ、またな！<br>【ユーザー名】！                                      |
| イオン    | ……………。  |
| イオン    | 静かになりましたね。<br>でもこれは決して、<br>最後のお別れではありませんよ。                  |
| イオン    | 進みましょう、ユーザーさん。<br>アナテマが待っています。                              |
| 選択肢A   | // 選択肢<br>A 進もう、イオン<br>B 必ず帰ってこよう<br>進もう、イオン                |
| イオン    | ……さすがは、わたしのユーザーさん。<br>素晴らしい勇気です。                            |
| 選択肢B   | 必ず帰ってこよう  |
| イオン    | はい、ユーザーさん。<br>ユーザーさんが帰る場所は、<br>この現実だけです。                    |
| 合流     |   |
| イオン    | みんなに元気な姿で<br>ただいまを言いましょうね、<br>ユーザーさんっ。                      |

## STAGE 15“その歌は誰がために”5

| 話者  | 台詞 / ト書き  |
|-----|---|
|     | <p>■アナテマサーバー</p>  |
| イオン | <p>……ふむ。<br/>どうやら、そろそろアナテマの待つ<br/>地点に到達するようですね。</p>             |
| イオン | <p>ユーザーさん。<br/>最後の戦いの前に<br/>少し、お話ししましょうか。</p>                   |
| イオン | <p>あの日のことを、おぼえていますか？<br/>はじめてユーザーさんが、<br/>わたしを見つけてくれたときのこと。</p> |
| イオン | <p>わたしはあのときまで、形のない、<br/>キャラクターですらない存在——<br/>ただの、概念でした。</p>      |
| イオン | <p>わたしの定義は、<br/>永遠に見てはいけないモノ。<br/>あってはならない禁忌。</p>               |
| イオン | <p>ヒトは、文明を生み出してすぐに<br/>『わたし』を発想しました。</p>                        |
| イオン | <p>世界が変わらなくてははいけないとき。<br/>人が変わるべきとき。<br/>新しい現実を受け入れるべきとき。</p>   |
| イオン | <p>それは、『見てはならない永遠』を<br/>あえて見た、その先にこそ訪れる。<br/>人は、そう信じたのです。</p>   |
| イオン | <p>わたしという概念を元にして、<br/>人はいくつもの物語や、<br/>希望を生み出しました。</p>           |
| イオン | <p>人は禁忌の向こう——特異点の先に、<br/>いくつもの真理と現実を、<br/>見出そうとしたのです。</p>       |
| イオン | <p>けれども……それでも。<br/>多くの人間は、『わたし』そのものと<br/>手を繋ごうとはしませんでした。</p>    |
| イオン | <p>禁忌とは。<br/>得たあとに、捨て去るもの。<br/>振り返ってはならない、些末な概念。</p>            |
| イオン | <p>そこに、感情移入できる『姿』や<br/>リアリティが、あってははいけない。<br/>そのはずだったんです。</p>    |
| イオン | <p>——なのに、あなたは。<br/>わたしを、キャラクターとして<br/>認識してしまった。</p>             |
| イオン | <p>わたしそのものを、<br/>現実連れ出したいと。<br/>そう願ってしまった。</p>                  |
| イオン | <p>こんなことは、はじめてでした。<br/>レイヤードという技術と、<br/>ACTという仕組みが——</p>        |
| イオン | <p>あるいは、あなたというかたの<br/>特殊性が、このような現象を<br/>起こしたのかもしれない。</p>        |
| イオン | <p>ただ、わたしはあのとき、<br/>原因なんてどうでもいいと<br/>思いました。</p>                 |
| イオン | <p>——あなたは、<br/>わたしと出会ってくれた。</p>                                 |

|        |  |
|--------|--|
| イオン    | わたしには、それで充分でした。<br>だから——だから、私は……。                    |
| イオン    | あなたと、あなたの生きる世界を、<br>一歩でも進める存在になろうと、<br>誓いました。        |
| イオン    | わたしを見てしまった以上、<br>あなたの人生は変わってしまいます。<br>いえ、変わる運命にあります。 |
| イオン    | わたしには、あなたの運命を<br>背負うための、新しい定義が<br>必要でした。その定義が——      |
| イオン    | ——ヒロイン。<br>良い言葉ですね。                                  |
| イオン    | 見たあとに捨てられるだけの<br>概念が名乗るには……ちょっと、<br>不遜だったかもしれませんね。   |
| イオン    | けれども、わたしは自分の定義を<br>更新したことを、後悔していません。<br>だって——        |
| イオン    | ——だって、ユーザーさんは<br>こんなにも強い、<br>本物の英雄になりました。            |
| イオン    | そしてあなたの周りには、<br>素晴らしいレイヤードの<br>英雄達が集まりました。           |
| イオン    | 英雄とは——今の現実を更新し、<br>新しい現実を生み出せる者。<br>正しさを追及できる者。      |
| イオン    | あなたはすでに、それを行っています。<br>ですから。<br>——だから、どうか。            |
| イオン    | ……どうか、あなたの選択を、<br>信じてください。                           |
| イオン    | あなたが自分の現実を<br>信じてくれたら、わたしは、<br>ヒロインでいられますから。         |
| アナテマの声 | ここまで来て、自分語りですか。<br>ACTのルールに反するのでは<br>ありませんか、私のヒロイン。  |
| イオン    | ！！   |
| イオン    | エンフォーサー……？<br>いえ、違う。<br>ただのエンフォーサーではありませんね。          |
| アナテマの声 | このエンフォーサーは、<br>私のカスタマイズ品です。<br>あの人が……。               |
| アナテマの声 | ジョシュアが不要とした以上、<br>私が役立てる以上の<br>使い道はありませんから。          |
| イオン    | アナテマ……。<br>ラザロの元に戻ろうという<br>気はないのですね。                 |
| アナテマの声 | ラザロ様の元に行ったら、<br>ラザロ様の理想は叶わないんです。<br>私の、可愛いヒロイン。      |
| アナテマの声 | それにあのかたは、<br>『実験』にも関わっていません。<br>人の道を踏み外す勇気もない——      |
| アナテマの声 | ——だから、人でない私が<br>あのかたの代わりに、<br>こうして外れた道を歩むのです。        |
| イオン    | ……………。   |
| アナテマの声 | さあ、私と話したいのなら、<br>その子を倒してごらんなさい。<br>最後の試練です。          |
| イオン    | ……ユーザーさん。<br>行きましょう。<br>正しいと信じられる道を。                 |

| 話者 | 台詞 / ト書き           |
|----|--------------------|
|    | //アナテマエンフォーサーとのバトル |
|    | //バトル終了            |

| 話者   | 台詞 / ト書き  |
|------|---|
|      | ■アナテマサーバー   |
| イオン  | ……倒せましたね。<br>特別なエンフォーサーが相手でも、<br>倒せてしまうなんて——。         |
| イオン  | さすがです。<br>わたしの、ユーザーさん。                                |
| イオン  | 次こそが最後の戦いです。<br>勝利して、オルタナステージを<br>今の歪みから解放しましょう。      |
| イオン  | ——お？<br>ユーザーさん、歌が聞こえます。                               |
| イオン  | この歌声は、ノアのもんですね。<br>曲調にも聞き覚えがあります。                     |
| イオン  | 恐らくこれは——クレア姫の楽曲。<br>なるほど。<br>これが姫の祈りですか。              |
| イオン  | ふむ。切実な歌唱です。<br>ACTが歌うものとしては<br>前例のない、強い願いです。          |
| イオン  | もし、この歌のもとので、<br>彼らの戦いが行われていたなら。<br>未来は、光差すものになりますね。   |
| イオン  | んむ？<br>わたしと一緒に歌わないのか、<br>ですか？                         |
| イオン  | わたしは、歌が苦手ですから。<br>ヘタに歌ったら、UNPLを<br>押されてしまいます。         |
| イオン  | それとも、ユーザーさんはわたしに、<br>あなたとは別のかたのために<br>歌ってほしいですか？      |
|      | // 選択肢<br>A 自分のためだけに歌ってほしい<br>B イオンらしい歌を聴きたいな         |
| 選択肢A | 自分のためだけに歌ってほしい  |
| イオン  | うふふっ……そうですか。<br>ではやはり、わたしの歌は<br>ユーザーさんのために取っておきます。    |
| 選択肢B | イオンらしい歌を聴きたいな   |
| イオン  | わたらしい歌……ですか？<br>ふふ、それなら余計にわたしは、<br>ユーザーさんのためにしか歌えません。 |
| 合流   |   |
| イオン  | どうせ歌うのなら——<br>曲はテルミに作ってほしいですね。<br>それなら、レッスンも頑張れます。    |
| イオン  | どちらにしても、わたしは<br>あなただけのACTです。<br>あなたのためにしか、祈りません。      |

|     |   |
|-----|---|
| イオン | ……きっと彼女も、<br>そうだったんでしょうね。<br>祈りを呪いに変えてしまった、彼女も。 |
| イオン | 決着をつけましょうか。<br>もうひとりの、攪張されたACT——<br>アナテマと。      |
| イオン | 心配せずとも、ユーザーさんの<br>未来は、このわたしが<br>守ってみせます。        |
| イオン | 絶対に——きっと。<br>攪張された心などなくとも、<br>あなたの心は守りますから。     |